

Tristram Shandy における女性性

——家父長制の権威を揺るがすもの——

佐 竹 由 帆

*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*¹⁾ の登場人物は、語り手にして主人公である Tristram をはじめ男性が多く、女性よりも男性の描写にページが割かれている。しかし、頻繁に登場する Toby 叔父や父 Shandy 氏などの個性的な男性登場人物たちに、その個性という点で決してひけを取らない女性登場人物たちがこの作品には存在する。本論では女性登場人物に注目し、*Shandy* における女性像、女性観、女性性の分析から見えてくるものについて考察してみたい。フランス旅行を描いた異色の第七巻にのみ登場する女性は除き、主に Shandy Hall 周辺の人物を中心に扱うことにする。

作中最も重要な女性登場人物は、Tristram の母、Shandy 夫人である。彼女は Tristram の出産の際に、ロンドンで出産したいという希望を持っていたが、虚偽の妊娠の申立てによってロンドン行きの出費をさせた場合、次の妊娠ではロンドンで出産できないという結婚契約に基づき、田舎で出産せざるを得なくなる。しかし、誰を頼むかという問題については、医師ではなく産婆に頼みたいという自分の望みを、夫と対決してかなえるだけの意志の強さを持っている。

Shandy 氏は、子どものためを思う気持ちや、出産で事故がおければ自分

1) Sterne, Laurence. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*. Oxford: Oxford UP, 1983. 以後 *Shandy* と略記し、引用のページはこれによるものとする。

が非難されるという私的な理由に加え、そのような事故によって女性 (“the weaker vessels of the gentry” <41>) がますます力を持つようになり、家父長制の基盤が揺らぐ恐れがあるという公的な理由から、男性の医師を強く希望している。そのため、自分の意向に従わせるべく、この問題を、“like a christian, — like a heathen, — like a husband, — like a father, — like a patriot, — like a man” と六つの角度から議論するが、Shandy 夫人は “only like a woman” という唯一つの角度からしか応戦できない (41)。このような議論は、“which was a little hard upon her; — for as she could not assume and fight it out behind such a variety of characters, — ’twas no fair match; — ’twas seven to one.” (41–42) であったものの、“so equal an advantage” (42) という結果に彼女は持ち込み、産婆を頼むが医師を控えさせるという妥協案に達している。このことから、Shandy 夫人は、聡明でないにしても、雄弁で頑固な Shandy 氏と互角に張り合えるだけの気力、粘り強さを持った女性であると言える。

また、Shandy 氏の六つもの角度に匹敵するだけの効力を、“a woman” という唯一つの角度は議論において持っていることになるため、様々なハンディキャップにもかかわらず、“a woman” の持つ力は決して小さいものではなく、“a woman” は独自の意志を持ち、簡単に男性の意のままにできる存在ではない、ということがこの場面では示されていると解釈できるだろう。Shandy 氏の家父長制についての見解が、話の中で言及されている、第一巻発表当時既に時代遅れだった一七世紀の政治学者 Sir Robert Filmer の概念に一致するという指摘²⁾を踏まえると、“a woman” の力が家父長制を脅かしていると読むことができるのではないだろうか。Filmer の名が政敵への嘲笑的なレッテルになっていた³⁾ことを考えると、Shandy 氏の家父長制支持の頑なさを笑う視点が、Sterne にはあったと考えられる

2) Sterne. *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*. Vol. 3. Gainesville: Florida, 1984. 90. 以下 TS. Vol. 3. Florida. と略記する。

3) Sterne. TS. Vol. 3. Florida. 90–91.

だろう。

Shandy 夫人の個性は、Shandy 氏との会話にもよく表れている。以下は、Tristram に半ズボンをはかせることについての、二人の“debate”の一部である。

I am resolved, however, quoth my father, breaking silence the fourth time, he shall have no pockets in them. —

— There is no occasion for any, said my mother. — I mean in his coat and waistcoat, — cried my father, — I mean so too, — replied my mother, — Though if he gets a gig or a top — Poor souls! It is a crown and a scepter to them, — they should have where to secure it. —

Order it as you please, Mr. Shandy, replied my mother, —

— But don't you think it right? added my father, pressing the point home to her.

Perfectly, said my mother, if it pleases you, Mr. Shandy. — (352–53)

Shandy 夫人は夫に常に同意の返答をしている。しかし、一八世紀の啓蒙主義の時代に生き議論を望む Shandy 氏は、同意が繰り返される会話の最後で腹腹してしまう。このような Shandy 夫人の性質は、彼女が夫との会話において持っている、“a way” によく表れている。

— and that was never to refuse her assent and consent to any proposition my father laid before her, merely because she did not understand it, or had no idea to the principal word or term of art, upon which the tenet or proposition rolled. (502)

Shandy 氏にとって彼女の“a way”は、“an eternal source of misery”であり、“more good dialogues between them” (502) をぶち壊しにしてしまうものである。Shandy 夫人の“a way”は、a weaker vessel としての立場から獲得されたものではあるが、夫と対峙していくための、一つの確固とした姿勢となっている。女性の御しがたさがユーモラスに表現されていると言えよう。

小間使の Susannah も Shandy 氏の願いを何度も打ち砕く存在である。Shandy 氏は、“I must counteract and undo it [the greatest evil] with the greatest good.” (223) という意図で、赤子のために “Trismegistus” (224) という名前を用意していた。しかし、“a leaky vessel” の Susannah に名前が覚えていられるだろうか、と懸念していた通り、“Tristram-gistus” (230) と彼女が副牧師に伝えてしまったために、Tristram という、Shandy 氏にとって最悪と言える名前がつけられてしまう。また Susannah は、Tristram に窓から小用を足させ、落ちてきた窓枠によって割礼させてしまっている。これらがまったく悪意なくなされているために、形而上的な思考に基づいて生きようとする Shandy 氏が、形而下的な世界に翻弄される様がより一層鮮やかに浮かび上がっていると言えよう。

Susannah には威勢のいい一面もある。割礼された Tristram の手当てをする Slop 医師を手伝う時、患部を見してしまうことについての、“a scruple of decorum” (331) が彼女に生じ、医師にひどくからかわれる。その後、手元を照らすろうそくの火を Slop 医師の髪につけてしまい、Slop 医師に、“You impudent whore!” (332) と侮辱され罨法薬を顔に投げつけられるが、そこで負けてはいず、すかさず罨法薬を投げ返している。彼女の威勢のよさは痛快であり、女性が必ずしも受け身の弱い存在ではないことを印象づける場面であると言える。主人や医師などの身分が上の人物とも対等に渡り合い、彼らを食う使用人として、性別は違うものの、Sancho Panza や Figaro に見られるような、「召使い＝主人」⁴⁾の部類に属する、澆刺とした人物像が提示されていると言えるのではないだろうか。

Toby 叔父の恋の相手となる寡婦の Wadman 夫人は、彼女より “concupiscible” なものではなく (375)、“a perfect woman” (440) である、と描写される女性である。彼女は恋の手練手管に長けており、Toby 叔父がパイプの先で図面を指し示しながら戦闘の説明している時、パイプを取り上げ

4) イポリット・テース、『英国文学史——古典主義時代』、手塚リリ子・手塚喬介共訳、白水社、1998. n.1-(254)、n.3-(66)。

て二人の指が触れ合うように仕向けたり (447-48)、黒目にごみが入ったと言って、目を覗き込ませたりして (465-66)、とうとう自分に恋させることに成功する。非常に積極的であり、ある意味では利口であるとも言えるだろう。また、Toby 叔父の鼠蹊部の傷について彼と話している時、“— You shall see the very place, Madam;” と言われた Wadman 夫人の頭に浮かぶのは、次のような思いである。

*“L — d! I cannot look at it —
 What would the world say if I look'd at it?
 I should drop down, if I look'd at it —
 I wish I could look at it —
 There can be no sin in looking at it.
 — I will look at it.” (514)*

ここには生身の女性の性への関心が、生き生きと表現されている。彼女の視線について Jacques Berthoud は、「意図的な無邪気さ」を含み、セクシュアリティーが感じられると指摘しているが⁵⁾、Wadman 夫人は大方的な官能性と積極的な行動力を持つ女性であり、作品に華やぎを与えていると言える。彼女のあからさまな性欲が、Toby 叔父を最終的に独身生活に向かわせることになるという Berthoud の指摘⁶⁾や、“a blow”による Toby 叔父の “modesty” (54-55) は、Namur での “a blow” と Wadman 夫人による “a blow” をかけた冗談で、後者の意味を主に意図しているのだろうという Mark Sinfield の指摘⁷⁾を踏まえると、Wadman 夫人の能動的なセクシュアリティーは、Toby 叔父のセクシュアリティーを圧倒してしまうような、過剰な力を持つと考えられるだろう。

“SLAWKENBERGIUS's TALE.” における鼻⁸⁾や、第五卷第一章におけ

5) Berthoud, Jacques. “Shandeism and Sexuality” *Laurence Sterne: Riddles and Mysteries*. Ed. Valerie Grosvenor Myer. London: Vision, 1984. 32.

6) Berthoud. 33.

7) Sinfield, Mark. “Uncle Toby's Potency: Some Critical and Authorial Confusions in “Tristram Shandy”” *Notes and Queries*. Feb, 1978. 54.

8) 男性器を暗示しているものと思われる。Sterne. *TS*. Vol. 3. Florida. 261-62.

る頬髭には性的なほのめかしがあると解釈できるが、それらによせる女性たちの強い関心の描写は、彼女たちの自然な官能性の表現と考えられる。女性のセクシュアリティが鮮やかに表現されている場面が、*Shandy* には散在していると言えるだろう。

Tristram の出産に携わる産婆も、重要な登場人物である。子供を抱えて寡婦となった彼女を憐れみ、教区牧師の妻が資格を取ることを勧めたことが、彼女が産婆になるきっかけである。女性について考えるという観点から、ここには注目すべき点が二つある。第一は、彼女が経済的自立を果たした働く女性であるという点である。自発的な選択ではなく必要に迫られてのことではあるが、彼女はこの職業によって自分と子供たちが生活していくための金銭だけでなく、“no small degree of reputation” (11) を得ている。父、夫、息子などとの関連によって世間に知られるのではなく、自分のなし得ることで生計をたて評価される女性というのは、当時の社会状況を考慮すると、この作品にあって非常に現代的な存在であると言える。

第二は、彼女に産婆の仕事を勧めることを思いついたのが教区牧師の妻であるという点である。女性が困っている時に手を差し伸べるのが同性の女性であるという点には、女性同士の絆、フェミニズム批評で言うところの *sisterhood* が表れている、と考えられるだろう。そして手を差し伸べる方法が、金銭を得る手段としての資格職の労働を提案するという、非常に現実的、具体的に有効なものであるという点には、教区牧師の妻の現実を見つめる目の鋭さ、すなわち聡明さが表れていると言えるのではないだろうか。

Tristram の大伯母にあたる Dinah も、ユニークな女性である。彼女は、gentleman である Shandy 家の階級より身分の低い coachman と結婚し、Shandy 氏によって、一家の評判にとって傷になる、非常に不名誉な身内として語られる。また、“all the SHANDY FAMILY were of an original character throughout” であるにもかかわらず、彼女は Tristram に、“I mean

the males, — the females had no character at all⁹⁾” (53) であった Shandy 家の唯一の例外的女性として、とらえられている。結婚という人生の重大な選択において自分の意志を貫く “an original character” を持った女性が登場するということ、そして “an original character” を持っているがゆえの彼女の行動が、男性たちに不名誉なものととらえられているということは、女性の抑圧という観点から考える時、見逃せない重要な点であると解釈できるだろう。

また、Dinah という名前について、“his hypothesis of Christian names” を持つ Shandy 氏は、“She would thank her godfather and godmother” (53) と言っているため、彼女の行動は名前に由来すると考えていることがわかる。Oxford 版の註には、Dinah は一七世紀半ば以来使用人や労働者によくある名前だったとあるが (547)、創世記三四章第二節には、Dinah という娘が凌辱される話がある¹⁰⁾。後者の説を取る場合、恐らく身内の反対を押し切ってまでも自分の意志を貫き結婚したという、彼女の “an original character” がはっきりと表れる行動が、Shandy 氏には凌辱されることと同列のものと見えていると言えるだろう。身分違いの結婚という点がこのような判断へと彼を導いている大きな一因であることを見逃してはならないが、自分の意志を貫いて家父長制の枠を超えていく女性の行動が、家父長制の枠の中で生きる男性には凌辱されたに等しい不名誉な事件であるということは、家父長制という枠が女性に対して非常に強く抑圧的に働いてきたことを示していると解釈できるのではないだろうか。

印象的なエピソードを残す人物として、他に曾祖母も挙げられる。曾祖母は年三百ポンドの寡婦財産を要求して、二千ポンドの財産しか持っていない彼女のそのような要求は不当だ、と曾祖父に言われるが、それに対し、

9) Alexander Pope の “Epistle to a Lady” に、同様の記述があることが指摘されている。Sterne. *TS*. Vol. 3. Florida. 110.

10) *The New English Bible: The Old Testament*. Oxford: Oxford UP, 1970. 45. なお、以下の指摘を参照した。Sterne. *TS*. Vol. 3. Florida. 110. 『トリストラム・シャండి』(上)、朱牟田夏雄訳、岩波文庫、1969. 385.

“Because, . . . you have little or no nose, Sir.” (173, 174) という言葉を二度口にすることで自らの要求を通して。鼻は男性器を暗示していると思われるため、曾祖父の性的弱点を利用して、夫亡き後の経済的安定を確保するというのは、少々ずる賢く見え、道義的には誉められたことではないかもしれないが、当時の女性の経済的には不安定な立場を考慮すれば許容されるべき仕方のないことであり、先見の明のある利口な行為であるとも考えられる。自らの意志とそれを貫き通す力、ある種の聡明さ、理性を備えた女性と総括できるだろう。

女性についての“opinions”にも、興味深いものが多数ある。出産の際、女性が“a right of deciding, *en Soveraines*, in whose hands, and in what fashion” (114) を主張することについての Shandy 氏、Toby 叔父、Slop 医師の話では、女性がこの権利を主張するのをもっともだと思うのは Toby 叔父だけで、他の二人は否定的な見解を述べる。この権利について Shandy 氏は、次のように言っている。“I know not, . . . what we have left to give up, in lieu of who shall bring our children into the world, — unless that, — of who shall beget them.” (115). この言葉から Shandy 氏が上の権利をかけがえのない重要なものと見なしていることがわかるが、Tristram の出産に関しては、前述のようにこの大権を Shandy 氏は完全にわがものとしているわけではない。

出産の場所や、誰を頼むかについての対立による妊娠中の Shandy 夫人の精神的不安定が、Tristram に悪影響を及ぼしたと Shandy 氏は嘆いているが (236)、妊婦の想像力が子に影響するという考え方は Shandy 氏独自のものではないものの¹¹⁾、男性が制御できない女性の影響力が示されると考えられるだろう。Slop 医師の、“they had better govern in other points” (114), “One would almost give up any thing” (115) という言葉も、その例と考えられよう。

11) McLaren, Angus. *Reproductive Rituals: The Perception of Fertility in England from the Sixteenth Century to the Nineteenth Century*. London: Methuen, 1984. 49–50.

Shandy 氏が産婆より男性の専門医に傾いた理由について、頭から先に産まれたがゆえに長男 Bobby は “a lad of wonderful slow parts” (121) になったので、次は足から産まれるよう試してみたいという考えから、“not easily to be put out of their way” (121) である産婆より、“whom he could better deal with.” (122) である男性の医者の方が望ましいと考えたためと書かれているが、これらの言葉にも、思い通りに動かし難い存在としての女性像が表れている。より扱いやすいという理由で Shandy 氏に好まれた Slop 医師の上記の見解 (114, 115) に、女性の御し難さに対する苛立ちのようなものが表れているのは、彼が好まれた理由を考えると、皮肉であると同時に滑稽でもあるといった印象を受けるのではないだろうか。

この Slop 医師は、Tristram 出産の際、産婆がその仕事をまかされ、自分は部屋で待機させられていることに、非常に不満を持っている。尻餅をついた産婆のかわりに Shandy 夫人を見るよう頼まれた Slop 医師は、“’twould be full as proper, if the midwife came down to me.” と応え、“what might have become of the garrison above stairs, ... but for the subordination of fingers and thumbs to***** [forceps]” (146) と続ける。また、下になっているのが本当に赤ん坊の頭かどうか産婆にわざわざ聞き、産婆がそうだと答えているのに、“as positive as these old ladies generally are, — ’tis a point very difficult to know” (149) と言っている。これらの言葉は産婆に対する軽蔑を表すと同時に、自分のほうが上の立場である、又はそうであるはずでありそのことを示したい、といった気持ちを表している。嫌味なところがあり、少々権威主義的な態度であるとも言えるだろう。

しかし、実力がともなっていればまだいいが、結局 Slop 医師は、産婆の “fingers and thumbs” が従うべきであると主張した彼の “forceps” で Tristram の鼻をつぶしてしまい¹²⁾、Shandy 氏の期待を裏切り、実力のな

12) 鼻がつぶれてしまったことと割礼について、Tristram が肉体の一部を現すたびに何かが奪われており、“a man proud, as he ought to be, of his manhood” (415) である Tristram の “manhood” は、一家の不運によって呪われている、という指摘がある。Seidel, Michael. *Satiric Inheritance: Rabelais to Sterne*.

さを露呈している¹³⁾。ゆえに、上の彼自身の言葉における権威主義的な傾向によって、皮肉にも彼自身の姿が滑稽味を帯びて浮き彫りにされていると言えよう。Slop 医師の権威主義は主に専門医としての立場に根差すものだが、その権威主義には家父長制的側面があると考えられるだろう。Slop 医師の失敗は、家父長制的側面を含む権威主義を笑う視点を、Sterne が持っていることの表れとして読めるのではないだろうか。

このように、出産における女性上位は繰り返し書かれている。このことは次の一節に比喩的に示されている。

of all the puzzling riddles, said he, in a marriage state, ... there is not one that has more intricacies in it than this — that from the very moment the mistress of the house is brought to bed, every female in it, from my lady's gentlewoman down to the cinder-wench, becomes an inch taller for it; and give themselves more airs upon that single inch, than all their other inches put together. (227)

この後に Shandy 氏は “Duce take” (227) という言葉で、このような状態に対するいらだちを表明している。

その後、母親の持つ力が何度か話題にされる。“*Whether the mother be of kin to her child*” という命題に対して、“*That the mother is not of kin to her child*” という裁きが下ったことが話題になった時、Shandy 氏は Toby 叔父が *Lillabullero* を吹かないよう口をふさいでまでも詳細を聞こうとする (262)。この討議は Henry Swinburne の、*A Briefe Treatise of Testaments and Last Wills* からのものであり、この話題を持ち出した Kysarcus は判決が

New Jersey: Princeton UP, 1979. 252. 鼻が男性器を暗示することを考えると、Tristram は “manhood” を繰り返し奪われていると読むことができるだろう。Tristram の性的不能場面の暗示 (415) や、Toby 叔父の性的能力が度々疑問の対象になっていることと考えあわせると、*Shandy* における “manhood” は、男性に無条件に備わっている属性ではなく、はかない不安定なものとしてとらえられていると解釈できるだろう。

13) これらは Slop 医師固有の態度ではなく、一八世紀の医者には産婆に否定的だった。しかし、正常分娩の場合は、医者がとりたてて優れているわけではなかったことが指摘されている。McLaren. 53–55.

道理にかなっていると主張しているが、Swinburne の考えは反対であるということが指摘されている¹⁴⁾。著者の意向とは反対の、母親を軽視する結論の肯定は、“it would follow, not only what indeed is granted on all sides, that the mother is not of kin to her child — but the father likewise” (264) という、父親も母親と同様に軽視する説に行き着く。そしてついには“the surest side”である母親の Shandy 夫人がまったく子どもと血縁でないなら、Shandy 氏は“still less than nothing”であるという意見が Yorick 牧師から出て、Shandy 氏は“That may well be”とその意見を認める発言をしている (265)。Sterne 自身が牧師であり牧師として不遇であったという共通点があることや、自身の説教集に *The Sermons of Mr. Yorick* という題名をつけていることなどから、Yorick 牧師は Sterne に一番近い人物と考えられる。Yorick 牧師の意見を即 Sterne のものととらえるのは早計だが、作者に最も近い人物にこのような意見を述べさせ主要登場人物に同意させていることから、必ずしも母親に比べ父親のみを重んじるわけではない視点を Sterne は持っていると考え得るのではないだろうか。

別の箇所では Shandy 氏は、“She [the mother] is under authority herself.”、“she is not the principal agent”という言葉を用いている (313)。これらは Filmer の一節であるが¹⁵⁾、前に述べたように当時既に時代遅れと見なされていた。一八世紀の家父長である Shandy 氏と一七世紀の Filmer を同一視することはできないが、上の発言はやや時代遅れの、現実と反する願望と考えられるだろう。母親の子に対する影響を最小限に見積もろうとするこれらの発言は、女性の持つ力が無視できないものであることを、ますます強調する結果になっていると言える。Shandy 氏が Tristram の受精、鼻、名前における不運を挽回すべく *Tristra-pedia* なる教育方針の本を書くこと

14) Sterne. *TS*. Vol. 3. Florida. 328–30.

15) Filmer, Sir Robert. *Patriarch and Other Writing*. Ed. Johann P. Sommerville. Cambridge: Cambridge UP, 1991. 192. なお、以下においても反復されている。Locke, John. *Two Treatises of Government*. Ed. Peter Laslett, Cambridge: Cambridge UP, 1988. 180.

に夢中になりすぎて、肝心の育児を Shandy 夫人にまかせきりにし (300)、母親が子に影響を及ぼす機会を増す事態を自ら招いているのは、非常に皮肉であると言えよう。

以上、主要な女性登場人物と女性についての“opinions”について分析した。この作品において、それぞれの女性は男性の登場人物に負けないだけの個性を持っているが、その個性や意志の力を男性に匹敵するほど発揮すると、その行動は男性には不快なものと思なされることが多い、と言える。しかし、女性の意志の力や自立といった側面は、完全に押しつぶされてしまうことはなく、登場人物の個性を形作るものとして表れている。

男性登場人物たち、特に Shandy 氏や Slop 医師は、これまで見てきたように男尊女卑的な発言をすることが少なくないが、彼らの観念とは裏腹に、実生活で翻弄されているのは彼らのほうであると言えるだろう。女性たちはそれぞれ男性よりも不利な立場にあっても、現実的な努力をして自分の意志をできる限り通し、男性の意のままには決してなっていない。このような観点から見ると、実生活では女性を意のままにできない男性が、女性に対し抑圧的な論理を構築し発現することで、観念の上においてだけでも女性に報復しようとしているとも考えられるのではないだろうか。そうであるとすれば、女性に対し抑圧的な言説も、現実生活における男女の力関係を知らぬいた上での、Sterne の裏返しの皮肉なユーモアが込められていると考えられるため、言葉通りに受け止めるのは早計だろう。

Sterne は女性に対する抑圧を描きながら、それにもかかわらず完全に負けてしまうわけではない女性たちを描くことで、逆説的に女性の力、“a way”、連帯といったものを鮮やかに描き出していると言えるのではないだろうか。それぞれの女性たちの存在感、魅力が期せずして生まれたものであるとは考えにくいので、Sterne には女性登場人物たちの個性を描き出す意図があり、それに基づいて彼女たちは描写されたと推測できる。時代の制約、限界はあるものの、Shandy は様々な点で女性性を内包する、開かれた新しいテキストとして読み得るのではないだろうか。